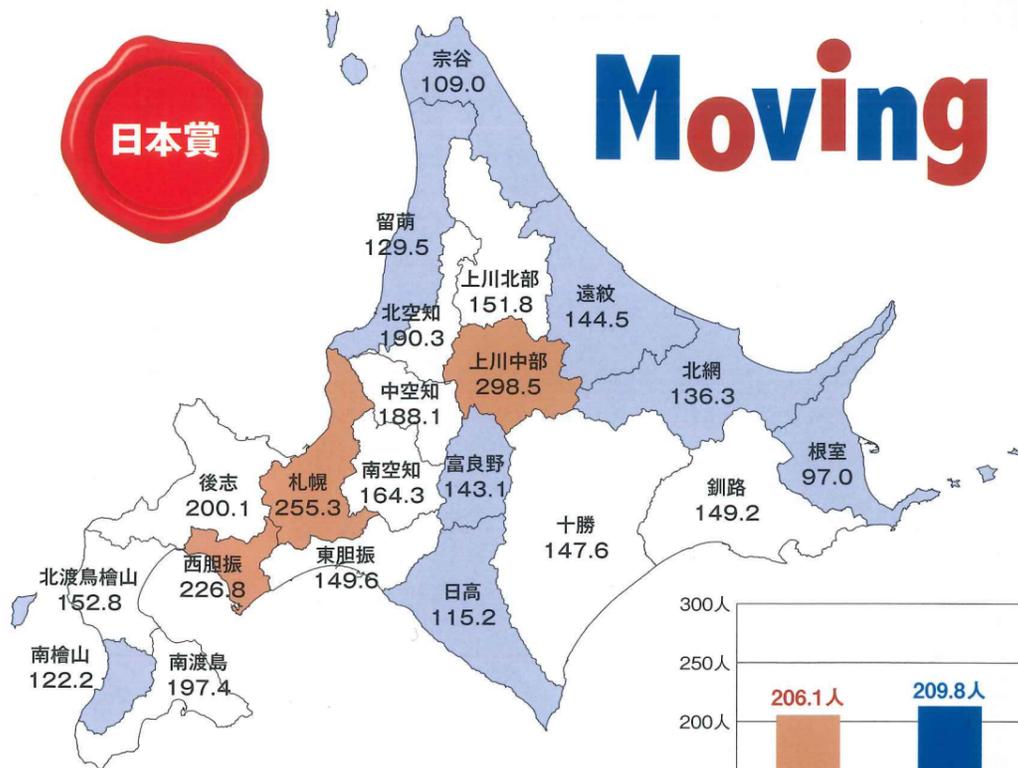


北海道脊柱靱帯骨化症友の会

Moving



理学療法士の佐々木雄一先生



■ 10万人対医師数が全道平均を上回っている圏域
■ 10万人対医師数が全道平均の70%以下の圏域

図1 | 北海道の2次医療圏における医師数 (人口10万人に対して)

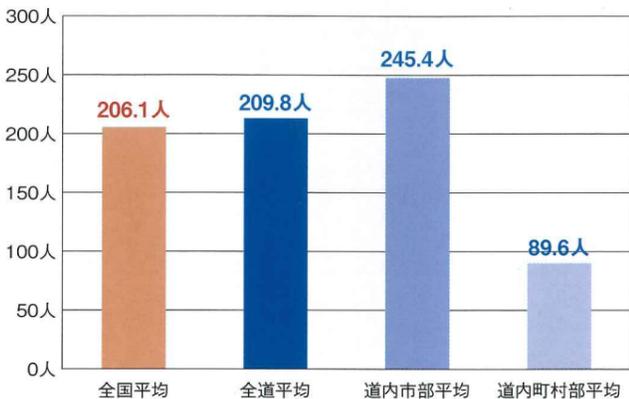


表2 | 人口10万人に対しての医師数 (2002年度)

くさんいるという現状があるので。その現状をなんとかしようとして、「北海道脊柱靱帯骨化症友の会」による取り組みが2014年より始まりました。それは、札幌医科大学附属病院の理学療法士らとともに、リハビリ指導者不在の地域に向いて家庭で無理なくできるリハビリ指導を実施するというものです。同時に、地域の保健所、医療機関、福祉・介護事業所などと広汎に連携をとりながら、それぞれの地域に合った医療講演会、患者交流会などを行い、患者さんのもとより患者家族、住民に対して、リハビリ、難病・障がい者医療への啓蒙も行うという活動です。

この取り組みの当初は、「後縦靱帯骨化症」の患者さんを対象に行っていました。「後縦靱帯骨化症」とは、椎体骨の後縁を上下に連結し、背骨の中を縦に走る後縦靱帯が骨になった結果、脊髄の入っている脊柱管が狭くなり、脊髄や脊髄から分枝する神経根が押されて、感覚障害や運動障害等の神経症状を引き起こす難病に指定された病気です。しかし、地域を回っているうちに「後縦靱帯骨化症」の患者さんだけでなく、それ以外の難病患者さんや動けなくて困っている高齢者の方などが多数いることがわ

また参加いただいた方は、直接理学療法士に質問をできるうえ、他の患者さんとの情報交換ができたと喜びの声も多数聞くことができ、患者さんやその周りの方々の孤立化を防ぐこともできる活動であることが認識できました。この事業を通して培われたネットワークも非常に大切になりました。そこで、今後もそのネットワークの維持、拡大をしていくために、医療過疎地での活動を継続していこうと思っています。とくに未開催地域での開催を実現し、北海道全域を網羅できるように取り組んでいきたいと思えます。

リハビリキャラバンの成果と未来
5年間のうちに全17市町村で延べ23回開催し、約800人に参加していただきました。総移動時間は片道で75時間になります。この活動を通して、患者さんの通院の困難さを痛感するとともに、医療過疎地では、普段の受診も大変なため、参加していただいた患者さん、患者さんを取りまく人たちから切実な質問を多く受けました。



リハビリキャラバンの様子

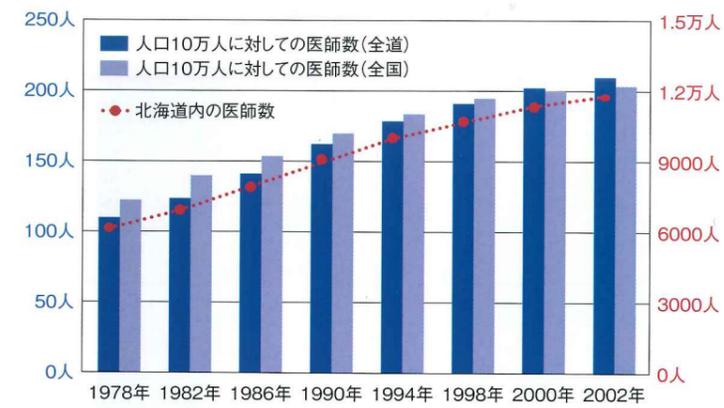


表1 | 医師数の推移

北海道のイメージといえば、そう、とにかくデッサン！国土の22%を占めるほどの巨大な面積を有し、国内外から高い人気を集める日本屈指の観光地です。札幌や函館、小樽など夜景のきれいなスポットや、富良野のラベンダーなど季節の花々、知床、大雪山、水の美しい支笏湖や摩周湖などの大自然があり、広大な土地だからこそさまざまな魅力があります。しかし、面積が巨大ゆえに、悩ましいこともあり。ちなみに東西距離777.41km、南北467.3km、面積は8万3457km²。この距離を移動するのは容易なことではありません。問題になってくることの1つに医療問題です。まずは人口に対する医師の数。

「リハビリキャラバン発動！」
このような北海道の医療資源の偏りや移動距離の長さなどの不便さによって、リハビリを受けることが容易ではなく、状態を悪化させている難病患者・障がい者がた

今年度の最優秀賞である「運動器の健康・日本賞」を受賞した北海道脊柱靱帯骨化症友の会の会長、増田靖子さんと、その活動を実際に行った札幌医科大学附属病院リハビリテーション部の理学療法士、佐々木雄一さんにお話を伺いました。

「リハビリキャラバン」をはじめとする運動器の疾患・障がいへの多面的な取り組み

「運動器の健康・日本賞」顕彰事業紹介